博慈会

老研一口伝言

ラポール力が回復を早くする

未病ケアで健やかに

問い合わせに応じて

これまで「カラフル」で数回にわたって"ラポール"という言葉を使ってきました。するとこのラポールについて読者から多くの問い合わせがありました。この機会にもう少しラポールについて述べておきましょう。

ラポールとは人と人との間における親密な信頼関係を言います。仕事の契約や事務的な信頼感ではなくて人間全体の信頼感の享受を指しています。その信頼関係になるきっかけをとらえた時にこのラポールな関係ができたと表現されます。

私がこのラポールを意識したのは、実は父の影響です。私が医師国家試験を終え、実家でのんびりしている時に、父自身が体験した不思議な感覚を語ってくれたのです。その時の会話を再現してみましょう。

父の体験から

「お前もこれから医者になるが、父さんが耳鼻科医になってまだ若い時に経験した患者さんで今でも不思議に思うことがあった。参考になるかもしれないな。それは喉頭結核の患者さんだったんだ。戦前だからストマイ（ストレプトマイシン＝抗結核剤）がまだなくて、喉頭結核と言えば致命的でほとんどが亡くなっていた。そんな患者さんを受け持った」「患者さんはどういう人？」「女性でまだ若かったな……当時の薬と処置だから限界はわかっていたが、なにしろ一生懸命、できるかぎり病室に顔を出し、良くなってもらいたい一心で話しかけ、治療したんだよ」「綺麗な人だったんじゃないの？」「そんな余裕はないさ（微笑）……すると不思議なことにだんだん良くなってきたんだ。これには驚いた。こんなことが医療では起こるんだな」

まだ免疫の仕組みやNK（ナチュラルキラー）細胞が発見されていない時だったので、自然免疫という概念はありませんでした。

今、考えてみると、ラポールな関係がその自然免疫力を上げていたのだと思います。

ラポール欠損症

逆に、患者さんのなかで、どうも治りにくい患者さんがおられます。確かに診断は正しく、適切な薬を処方しているにもかかわらずです。もちろん、糖尿病の有無や、持病の有無などを補正して考えても改善度合いが悪く、腑に落ちない患者さんがいらっしゃるのは確かです。多分に私の能力不足にあるかもしれませんが、そんな時、往々にして感じられるのが、ラポール不足（ラポール欠損症）という場面です。

1. 一方的に自分の病名を言って、知っている、飲んだことのある薬を出してもらえばいいと主張する患者さん。
2. 必要と思われる検査を拒否する人。
3. 大きな大学病院にかかわっていることをやたら吹聴する人。
4. 待ち時間が長いと苦情を言う人。
5. 外国旅行に行くので、念のため抗生剤を出してくれと言う人。
6. ドクターショッピング（よりよい医療を求めていくつもの医療機関を渡り歩く）する人。

患者さんとの間になるべくラポールな関係を深めようと思うこの頃です。最近ではこのラポールな関係は症状の回復も早くなり、ひいては医療費の抑制、医療訴訟の回避にもつながることがわかってきました。妙薬です。なにしろ患者さんと医師とにだけ共有される「ラポール力」は「治す力」の活性剤ではないでしょうか。まさしく未病の薬と言えます。

●著者プロフィール
福生 吉裕（ふくお　よしひろ）
一般財団法人博慈会　博慈会記念総合病院附属　老人病研究所所長
日本医科大学連携教授
『未病息災』（源草社）など著書多数

老人病研究所